



## 大丁会 遂に千秋楽

西村健吾（昭25）

春分の3月21日午、曇（みぞれ）模様の悪天候の中、86歳の昭和19年4月都立四中入学・一年丁組・同級生4人はグランドアーク半蔵門の貴賓室・響に足を運んだ。ブルサギ甲組、ゾウ乙組、ロバ丙組、ダイシェン丁組、カニ戊組、当時の担任の先生方の懐かしい渾名（あだ名）別5組、250名の最後のクラス会（大丁会）の千秋楽である。福島正義先生の薫陶を受けた紅顔50名中元気に生き残る約9名中の4人なのだ。翌朝、SMSメールが大橋から西村宛に届いた。

「昨日は有難う。夕食に赤飯おいしくいただきました。ここまで続いたのは貴君のお蔭、心配りの名幹事に最敬礼。大橋秀<sup>1</sup>西村もこれでダイシェンとの幹事継承の約束を、やっと果たせたと肩の荷を下ろす事が出来た。実は、4人の内2人は愛妻を亡くされているため、元気に迎えた千秋楽の手土産に、大橋には自炊の助けになるかとまた山田は以前、府中に住んでいたの、地元の銘店青木屋の赤飯をと選んだ次第である。



写真で各自が手にしている折が手土産の赤飯  
(松崎一男、矢島昭よりは欠席残念の電話があった)

そして今回は毎度の色紙に代えて、3人に大丁会への思いを書いて頂いた。

### 大橋秀雄「たった一年、でも一生」

四中合格を喜んで呉れた父が、入学の2週間後に北京で戦病死した。跡を継いで立派な軍人になりなさいと洗脳された私は、当然のように陸幼（陸軍幼年学校）を目指した。それを知ったダイシェンは厳しく私を鍛えて下さった。終戦後の先生を知らない私には、近寄りがたかったダイシェ

ンの勇姿がそのまま残っている。丁組からは6人が合格して翌年、西八王子の健武台で将校生徒の日々が始まった。しかし4ヶ月半で敗戦。焼き尽くされた校舎の跡地で玉音放送を聞いた。「これから親元に帰り、文化国家建設に努力せよ」と訓示を受け、背囊を背負った敗残兵姿で父の生家に疎開していた母の元に辿り着いた。それから大学のため上京するまで4年半、戦後の苦難の時代を新潟の小さな城下町で過ごした。

私と四中とのご縁は、たったの1年。それでも同窓会名簿で昭和25年卒の仲間と名前を連ねているのは、武士の情けか、ダイシェンのお蔭か。長男が四中の焼け跡に建った牛込三中を卒業し、次男が戸山高校を卒業した親子合算の特典かも知れない。「たった一年、でも一生」級友諸兄の変わらぬご友誼に感謝は尽きない。佐内坂を登って四中に通い始めてから74年、友はそれぞれの歴史を背負いながら老いて逝った。今日ここに大丁会の幕引きを見届けられる者は元気で動けるといふ天の恵みを授かっている。生きている限り、激動の時代の生き証人であり続けよう。